

博士学位論文審査要旨

2011年1月18日

論文題目： 演劇的再構成によるヨブ記解釈の試み

学位申請者： 平野 満義 (ひらの みつよし)

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 石川 立

副査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 越後屋 朗

要 旨：

本論文は、ヨブが苦難から回復されたタイミングが、ヨブと神との和解が成立したと考えられる 42 章 6 節ではなく、ヨブが彼の 3 人の友人らのために祈ったとされる 42 章 10 節に置かれているのは何故かという問いについて、ヨブ記を演劇に見立て、その演劇的な再構成という手法を採用することによって答えたものである。

本稿は 3 部構成を採り、第 1 部 (1 章) においては、ヨブ記を巡る研究史の概略、緒論、ヨブ記の舞台と登場人物の名前、テキストを巡る論点、高層批評、神学上の焦点について争点や学説を整理している。

第 2 部 (2~4 章) では、2 章において問題設定と論文の基本姿勢について明らかにした後に、3 章においては、問題の箇所である 42 章 10 節や 42 章 6 節を対象に各種翻訳聖書の理解を確認している。また 42 章 6 節との関連で神の弁論についても検証している。4 章では、3 章までに明らかになった問題点も踏まえてテキスト理解のさらなる深化を図っている。

以上の考察を通して、ヨブが神に対して執り成した対象を指示する言葉 42 章 10 節の רְעוּהוּ (re`ehu) に文法上の不都合があることを確かめ、ヨブによる執り成しの場面において、或る別の存在が想定されることを示している。また、同じ執り成しの場面で、祈りを意味する動詞 פָּלַל (pll) に付く前置詞 בְּעַד (ba`ad) に、3 者関係を前提にした意味合いがあることも指摘する。

第 3 部 (5~8 章) では、ヨブ記全体を立体的かつ創造的に読むためにヨブ記を演劇的に再構成する取り組みに着手し、新たなヨブ記理解を提示してゆく。

まず 5 章では、ヨブ記を演劇的な枠組みの下に取り扱うことの妥当性を論じる。さらに、平田オリザの演出論を援用することによって神の弁論の再解釈に取り組み、いまだ苦難の中にあるヨブの傍らに、今ひとりの存在、サタン影を見出す。

6 章においては、神の弁論の場に見出されるに至ったサタンについて改めて注目し、ヨブ記におけるサタンが神の下にある検察官の役割を担った働き手にほかならないことを論じる。また 4 章で指摘した רְעוּהוּ (re`ehu) の文法問題に絡んで、ヨブの執り成しの場にサタンが居合わせたことを論証する。

7 章では、ヨブ、神、サタンの 3 者関係を前提に、ヨブ記における苦難と執り成しの祈りを空間的に構図化し、これを基礎にして主要な登場者や場面について演劇的な再構成を図る。

8 章では、神との生きた関係こそがヨブ記の最大のテーマであることを示す。また、そのテーマを表現するためにこそ、サタンの失敗とヨブの苦難は描かれているのだとする。さらに、38 章のヨブに対する神ヤハウエの顕現において、シャダイという名で表象されてきた個人神と、創造神にしてイスラエルの神であるヤハウエとの統合が果たされたのだとする。

以上の考察を経て、本論文は、ヨブの苦難からの回復のタイミングのずれを、その場にサタンが居

合わせていたことによって説明する。また、義人ヨブは苦難の中にあっても、ひたすら神を求め、神に叫び訴えずにはおられなかったのであり、この神との対峙を通してヨブはシャダイとヤハウエをひとりの神として見神したとしている。

本論文はヨブ記の総合的な文献学的、聖書学的な研究にとどまらず、また単なる類型研究にとどまらず、ヨブ記を演劇として再構成することによって、ヨブ記理解における諸問題を解決して新しい解釈を提示することに成功している。

困難なテーマについて意欲的に取り組んだ論文として高く評価でき、よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2011年1月18日

論文題目： 演劇的再構成によるヨブ記解釈の試み

学位申請者： 平野 満義 (ひらの みつよし)

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 石川 立

副 査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副 査： 神学研究科 教授 越後屋 朗

要 旨：

平野 満義氏は、2005年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程前期課程を修了し、2005年4月、後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たして2010年10月に学位論文を提出した。2011年1月18日午前10時より、神学研究科委員会は平野氏に対して約2時間の総合試験を実施し、氏から十分な聖書神学的素養を背景にした的確な応答を受け、氏が学位請求論文の主題領域について深い洞察を有していることを確認した。研究に必要な語学力については、博士論文執筆のためのヘブライ語、英語、ドイツ語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 演劇的再構成によるヨブ記解釈の試み

氏名： 平野 満義

要旨：

本稿は、ヘブライ語聖書のヨブ記を対象に、1つの問題意識を足掛かりとして、その新たな理解を目指したものである。

その問題意識とは、ヨブ記の焦点が、従来考えられてきたように、ヨブと神との2者関係の中にあるのなら、ヨブが苦難から回復されたタイミングが、何故にヨブと神との和解が成立したと考えられる42:6ではなく、ヨブが彼の3人の友人らのために祈ったとされる42:10に至ることとなったのか、である。

本稿ではこの問題に答えるために、ヨブ記を演劇に見立て、その演劇的な再構成という手法を採用する。

本稿は3部構成を採り、第1部(1章)においては、ヨブ記の研究史と論点をテーマに、ヨブ記を巡る研究史の概略、緒論、ヨブ記の舞台と登場人物の名前、テキストを巡る論点、高層批評、そして神学上の焦点について、様々な争点や学説を整理する。この中には、本稿の後の展開にとって有用なものとなる議論や学説も多々含まれることとなる。

なお神学上問題に関連し、19章における「贖う方」と神の関係性と、苦難の義人像については、判断を保留する。

また第2部(2~4章)においては、2章において、本稿の問題設定と基本姿勢について明らかにした後に、3章より、ヨブが見舞われてきた苦難から回復されたことが記されている42:10を始め、当初に記した理由によって、ヨブが苦難から回復されるタイミングとしては、むしろより適当であったと考えられる42:6も対象に、各種翻訳聖書における問題点の理解を確認する。また本稿の問題意識の前提となる、42:6におけるヨブの改悛の理由について考える上で、従来のヨブ記理解においても重要な位置を占めてきた、神の弁論における、神の言葉についても検証する。

さらに4章においては、3章までに明らかになった問題点も踏まえて、テキスト理解のさらなる発展を図る。

こうした過程において、本稿では、問題の42:10の記述に含まれ、ヨブが神に対して執り成した対象を指示する言葉として使用されているヘブライ語 רָעוּהוּ に、実は従来理解されてきた「男性複数合成形+接尾辞3人称単数」ではなく、「男性単数合成形+接尾辞3人称単数」であると考えるを得ない文法上の不都合があることを検証。この言葉が、ヨブによる執り成しを受けた者を支持する言葉として使われ、従来は「友人たち」と、ヨブの3人の友人らを指すと考えられてきたことを踏まえて、そこに新たな対象者、別なる存在を探す必要があることを指摘する。

また同時に、これと同じ文章に含まれる執り成しの祈りの表現に関連して、祈りを意味する動詞 רָצוּהוּ に連動して用いられる前置詞 בְּ に、3者関係を前提にした意味合いがあることなども指摘する。

第3部(5~8章)では、物語としてのヨブ記をより立体的かつ創造的に読み込み、その全体像を再構成するために、ヨブ記を演劇的な枠組みの下に位置付け、演劇的に再構成する取り組みに着手し、本稿としての、新たなヨブ記理解を提示してゆく。

そのための導入として、5章において、ヨブ記が持つドラマ性について確認するとともに、ヨブ記とギリシャ悲劇との間に類似性が認められること、さらには、聖書解釈自体にも演出行為と相通する点があることなどを指摘し、ヨブ記を演劇的な枠組みの下に取り扱うことの妥当性を論じる。

さらには、平田オリザの演出論を援用することによって、神の弁論における、神の言葉の再解釈に

取り組む。

38章における神の顕現が、それまでのヨブの叫びや訴えを前提にしている以上、ヨブを前に展開する弁論の内容には、そうしたヨブの叫びや訴えに対する応答が期待される場所であるが、実際には、そうした関心からは全く乖離した話に終始していることが挙げられる。従来の理解に基づけば、こうした成り行きは、人間に対する神の絶対的な優位性や自由の裏付けとされてきたが、登場人物の発話は、周囲との関係の中から引き出されるものであるとする平田オリザの演出論をこれに当て嵌めて考えてみるなら、その内容は必ずしもヨブに対してのみならず、他に別なる聞き手を持っていたのではないかと、とする仮説が成り立つことになるのである。

こうして本稿は、未だ苦難の中にあるヨブの傍らに、今1人の存在の影を見出すこととなる。そして、その条件に当て嵌まる登場者について検証する中で、神的存在としてのサタンに行き着く。

6章では、神の弁論の場に見い出されることとなったサタンについて、改めて注目する。この結果、ヨブ記におけるサタンは、新約聖書に見られるような、デーモニッシュな存在とは異なり、あくまでも神の下にある、検察官のような役割を担った働き手に他ならないことを論じる。

また4章において、ヘブライ語 הַטֵּן の文法問題に絡んで、ヨブの執り成しの場に、3人の友人らとは異なる、別なる存在が居合わせていた可能性を指摘していたが、本稿ではこれと、前に神の弁論の場はその姿を見い出していたサタンとを同定する仮説を提示し、 הַטֵּן が示唆する別なる存在もまた、神の弁論の場に居合わせ、そのままその場に居残っていたサタンであったことを、コンテキスト、物語構造の類似性、語根の共鳴、高層批評—という4つの側面から論証する。

7章では、ヨブ、神、サタンの3者関係を前提に、ヨブ記における苦難と、執り成しの祈りを、空間的に構図化し、これをベースに、ヨブ記そのものの主要な登場者や場面について、演劇的な再構成を図る。こうした中で、神の弁論の際には、ヨブは依然としてサタンの影響の下に置かれ、苦難の中に居たのであり、そこから脱するためには、サタンがヨブの執り成しを受け入れる決心をする時を待たねばならなかったことを説明する。

8章では、これまでの考察を踏まえて、ヨブ記の存在意義が、何よりも神との生きた関係性を持つことの重要性を示すことにあったこと、そしてそのために、サタンの失敗とヨブの苦難とが求められたのであろうとする理解を示す。

さらに、ヨブ記をギリシヤ悲劇との類似性から演劇として見立ててきた関係から、唯一説得力に欠けてきた「認知」に関連して、当初からその最大の候補としてきた、ヨブの改悛を記す42:6について、再度考える。ヨブの改悛の理由については、4章の段階で、一先ずヘブライ語聖書におけるヤハウエとの関連での見神を挙げていたのであるが、ここに、1章の段階で積み残していた、19章における「贖う方」と神との関係性についての問題を絡めることで、さらなる理解を図るためである。

そうした結果として、ヨブ記においては、ヘブライ語聖書において一般に用いられるヤハウエ (יהוה) やエロヒーム (אלהים)、エール (אל) などの他にも、数多く神を指す名称が使用されているが、先人たちの研究成果を念頭にこの問題を整理し直してみるなら、当初ヨブが自らとの関連において想定してきた神とは、あくまでもヨブの個人神的な神だったのであり、ヤハウエに関する認識は、それとは別なものであったと考えることができる様子が浮かび上がってくる。そしてこうした理解の上に立って、38章における神＝ヤハウエの顕現を捉え返すと、それはヨブにおいて、個人神とヤハウエとの統合が果たされたことを意味したのだという理解に到達する。

以上のような考察を経て、本稿では、直接的な問題意識としてきた、ヨブの苦難からの回復のタイミングのずれに関して、その場にサタンが居合わせていたことによって説明を果たすとともに、ヨブ記そのものについては、神との生きた関係性の重要性を示すための所であったことを再確認する。そしてさらには、義人ヨブの苦難に意味があったのだとすれば、それは、そうした状況がヨブを、只管に神を求め、叫び訴えずにはおけない境遇へと置いたことにあったのであり、そのことが、従来ヨブの親しんできた個人神としての神と、創造神にしてイスラエルの神であるヤハウエとを統合するという形での、神の顕現をもたらしたのではないかとする、新たな理解を得るに至るのである。(了)